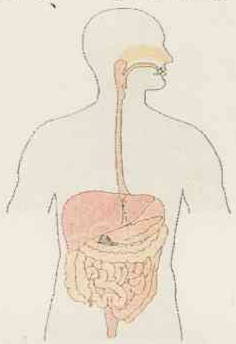
看護大通信 33

新潟県立看護大学
生物・医学領域教授
関谷　伸一

蘭学医と看護学生

幕末の一八四四年秋、直江津の町に東洋一の蘭学者高野長英が現れたという吉村昭の歴史小説「長英逃亡」は大変興味深い作品です。牢破りをやった長英は、清水峠を越え十日町から松代を通って今町（直江津）に逃亡してきたというのです。今町在住の和算家小林百哺と豪商福永七兵衛が命をかけて長英をかくまうくだりは、時間のたつのを忘れて読みふけってしまいます。緊迫感あふれる逃亡生活の様子はもちろん小説ですが、裏づけとなった史実は、上越の郷土史研究家故渡辺慶一氏が明らかにしたものです。

蘭学とは、江戸時代に日本に入ってきたヨーロッパの学術文化のことです。当時の医学者たちはオランダ語で西洋医学を学びました。西洋医学の優れた点は、実証主義にあるといえるでしょう。人体を解剖し、詳細に観察し、病気の原因を調べ、手術や治療方法を開発してきたのです。しかし幕府は人体解剖を許さず、一七五四年になってようやく山脇東洋に許しがおり、その二十年後に杉田玄白が「解体新書」を著しました。新潟県では、八三二年に長岡藩医の新川順庵が解剖を行いました。こうして人体解剖の重要性が広く認められ、現在では全国の医学部・歯学部で実施されています。しかし医療を担うのは医師と歯科医師のみではありません。看護師をはじめ多くのコメディカルの人たちがいます。これらの人たちにとっても、正しい人体の構造と機能に関する知識は必須です。

新潟県立看護大学においても、多くの時間を人体の構造と機能の勉強にあてています。そして遠く離れた新潟大学医学部に出かけていき、人体解剖の見学をさせてもらっています。実際の心臓や肺を見学し、まさに「百聞は一見に如かず」の気持ちになります。

このような医学部・歯学部での解剖学教育は、医学のためにわが身をささげてくださる献体という行為によって初めて可能となっています。見学を終えた看護学生は、人間の死という現実に直面し、そして究極のボランティアである献体の精神にふれることによって、看護という仕事の責任の重さを再認識し、これから看護学の勉強に邁進することを心に誓って上越に戻ってきます。おそらくかつての山脇東洋や杉田玄白と同じ心境になって。